

燕で感じる、技術と人の魅力

歴史の中で培われた技術と、移住者を迎え入れる人の温かさ。この二つの魅力に惹かれ、燕で新しい挑戦を続けている岩浪さん。燕は、若者にとって新しい一步を踏み出しやすい環境だったと語ります。

過去を学び、遊びを加えて、未来を生む

デザイン性や歴史的背景に触れるたび、煙管の奥深さに魅了されていた岩浪さん。岩浪さんが制作において大切にしているのは、昔ながらの形を尊重しながらも、その中に「遊び」を加えることです。過去に職人が取り入れたアイデアを組み合わせながら、自分らしい要素を加えた新しい表現に挑戦しています。ものづくりとは、過去を守り抜くだけでなく、過去を学び、見つめ直しながら、次のかたちへと進化させる営み。ゼロから生まれる完全な新しさは限りなく少なく、時代ごとに受け継がれた「モノ・コト」の上に積み重なっていくものです。

飯塚さんは、岩浪さんが抱く技術を受け継ぐ「職人」のイメージをいい意味で覆しました。例えば、既存の道具を

仲間と広がるものづくりの日々

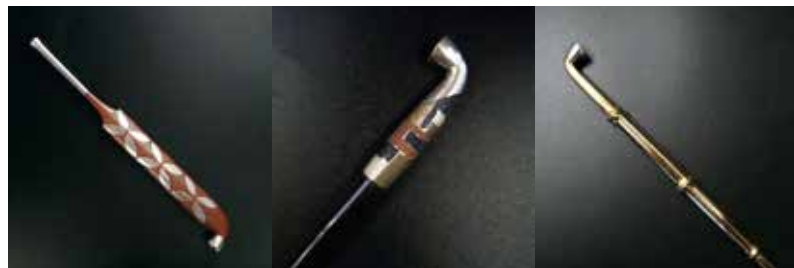
「最初はYouTubeや既存の煙管を手本に独学で学びましたが、移住後は人との出会いが学びの大きな糧になりました。技術以外の部分で学びが多いのも燕ならではの感覚です」

燕市はこれまでの歴史において、技術や文化、そして人を積極的に受け入れ、発展してきた地域です。その精神は現在でも脈々と受け継がれ、外からやってくる人々や新たな「モノ・コト」を温かく迎え入れる風土が自然と根付いています。

岩浪さんは、玉川堂の紹介で知り合った若手職人たちの交流を通じて、技術的なアドバイスを受けたり、ものづくり以外の分野でも刺激を受けたりしています。移住した当初は、誰も知らない土地で不安を感じることもあったと振り返ります。しかし今では、このまちで築いた人間関係が、制作環境だけでなく生活そのものの心地よさにつながっています。

改造し、より効率的で使いやすい物へと工夫したり、高齢でありながらも、手描きの図面ではなく、パソコンを用いた図面作成を取り入れてデザインしたりするなど常に時代に合わせてアップデートしていたのです。岩浪さんは、その姿勢に触れ「伝統とは新しい挑戦の積み重ね」だと強く感じたと言います。独学で煙管制作を始めた岩浪さんにとって、飯塚さんとの出会いは、大きな学びとなりました。燕のものづくりの歴史を紐解くと、飯塚さんが示していた「常に工夫し、新しい挑戦を重ねる」姿勢が、このまちのものづくりの発展と強く結びついていることがわかります。

▼岩浪さんの作品



市が主催した移住者交流会
写真中央：岩浪さん

◀玉川堂の職人との
交流会の様子



株式会社玉川堂
しろとり
白鳥 みのりさん

い発見や挑戦が生まれていく。その循環こそが、このまちのものづくりを面白くしていると感じています。



仲間の声

■仲間と交わり、広がる視点

燕に煙管という少し特殊な分野で新たに飛び込んできた人が加わったのは、とても新鮮な出来事でした。銅器と煙管は似ているようで、実は違いが多いです。これまで玉川堂では、煙管展を企画していましたが、岩浪さんと話をするなかで、県外の金工の知識や視点を聞けるようになり、「なるほど」と思う場面が増えました。

また、職人同士の交流会は、技術的な刺激だけでなく、お互いの価値観やモノの見方を交換する場にもなっています。コミュニティが広がっていくことで、新し

interview

燕の煙管産業を見つめて

日本たばこアイメックス株式会社（東京都）

井坂 恭子さん

2014年の飯塚さんとの出会いから、岩浪さんが技術を受け継ぐ現在に至るまで、燕の煙管に関わり続けている井坂さん。以来約10年、喫煙具の企画やミュージアムショップの運営を通じて、煙管の価値を「実用品」と「工芸品」の両面から見つめてきた専門家の目に、燕の魅力はどう映っているのでしょうか。



燕ならではの特徵

初めて燕の煙管を手にしたとき、まだ手作業で作られている職人がいる事実に驚きました。飯塚さんは銀煙管を30本単位で同じ品質に仕上げます。その根気と精度は、ほかに類を見ないものでした。そのおかげで、多くの人に手仕事の煙管を届けることができたのだと思います。

燕のものづくりには、依頼されたものをただ形にするのではなく、その先の「より良いもの」を追求してくれる懐の深さがあります。指示以上の工夫を惜しまない柔軟さと探究心は、他の地域には見られない燕ならではの特徵です。

飯塚さんの技と人柄、岩浪さんへの期待とは

飯塚さんの姿は今も鮮明です。展示会の打ち上げで歩く速さに追いつけなかったことや、海外へ招かれるほど精神的に活動されていたこと。技

術も人柄もよく、多くの人に慕われていました。依頼側の思いを受け止め、コストを含めて最良の形を探る姿勢は、まさに職人の鑑でした。

現在、燕で煙管の制作を手がける若手の岩浪さんには大きな可能性を感じます。繊細な手仕事で古典の美を再現するだけでなく、SNSを通じて自ら発信する力を持っている。伝統と新しさの両方で、これからの燕を牽引する存在だと期待しています。

変わり続けるからこそ受け継がれる

燕の煙管の価値は、道具としての実用性と工芸品としての美しさを兼ね備えている点にあります。完全な手仕事で作られる煙管は今や希少であり、その造りは文化財にも匹敵するものです。

私にとって継承とは、同じものを繰り返すことではなく、時代に合わせて変容しながら続いていくことです。燕の金属加工が和釘から煙管、そして金属洋食器へと形を変えてきたように、変わりながら続く力こそがこの土地の最大の強みだと思います。